日本の野宿者 ― 構成と労働

青木秀男

一、見える野宿者

野宿者の人口

生きるということは一年三六五日の連続した営みだ。一年公園で生きれば、それなりにリズムができる。生活が確立する。生命の縮小につながる途であると判っていても、選択すべき道がなければそうせざるをえない［第三〇回釜ケ崎越冬闘争委員会　二〇〇〇・一・三］。

一九九〇年代に入り、日本の都市に野宿者が「現われた」。野宿者は、豊穣のなかの貧困、「隠蔽しえぬ外部」(1)として可視化した。今、野宿者は、現代日本の都市下層の中心的存在となった。現代都市の世界都市化のなかで、野宿者はどのように増加したのだろうか。野宿者の存在様式は、どのようなものだろうか。そもそも、野宿者とはだれなのだろうか。本稿では、入手できた情報をもとに、全国の野宿者の実態を俯瞰しつつ、これらの問いに迫りたい。

まず現在、日本の都市に、野宿者はどれほどいるのだろうか。野宿者の人口は、もとより、経済情勢や季節、月、曜日、時間によって大きく変動する。けだし野宿者とは、本来、都市のもっとも漂泊的な人びとである。どのように人口のカウントをしようとも、それはつねに「調査時点」のものでしかない。また野宿者の人口は、野宿者の定義やカウントの方法（さらにカウントの目的）によって変動する。定義やカウント法についても、議論は多い(2)。要するに、野宿者人口の確定は容易でない。行政もまた、システマティックで継続的な野宿者調査の経験をほとんどもたない。ようやく最近、大阪市の大阪市立大学への委託調査など、本格的な野宿者調査が

始まったばかりである。

とはいえ、確実なことがある。野宿者はあきらかに増加した。厚生省の集計によれば、一九九九年一二月に、全国の野宿者は二万人を越えた。三〇人以上の野宿者を抱える都市について、野宿者数は、次のように集計された［読売新聞　一九九九・一二・一八］。

大阪八六六〇、東京都五八〇〇、名古屋一〇一九、川崎九〇一(3)、横浜七九四、神戸三三五(4)、京都三〇〇、福岡二九六、北九州一六六、尼崎一六〇、熊本一二二、広島一一五、千葉一一三、仙台一一一、市川一〇〇、松山九〇、宇都宮八六、堺八三、豊中七六、大宮六九、川口六五、藤沢四八、金沢四六、西宮四六、柏四五、福山四四、札幌四三、府中四〇、摂津三五、豊橋三四、東大阪三三、姫路三〇、久留米三三

野宿者の総数は二万〇四五一人で、これは同年三月時の調査の二六％増である。野宿者は、大規模な都市に集中するが、近年、地方都市へ拡散しつつある(5)。しかもそれでもなお、いくつかの都市での筆者の個人的な見聞や情報からしても、これらの数字はかなり控え目である。都市ごとにカウントの方法も異なり、これらの数字は一つの目安でしかない。実際、大阪だけですでに一万五〇〇〇人、全国で三万人をゆうに超えたともいわれる。野宿者人口の確定が容易でないこと自体、野宿者の漂泊性を物語っている。

上のリストの内、大阪の野宿者人口は、一九九八年に大阪市立大学のグループが市に委託されて行なった調査に基づくものである。大阪の野宿者は、東京より多い。都市人口の規模に比して際立っている。この人口の大きさは、なによりも寄せ場・釜ケ崎の現役・元日雇労働者の人口の大きさに規定されている。釜ケ崎は、大阪都市圏の一極集中型の日雇労働市場となっている。ちなみに大阪市内の野宿者が多い区をみると、西成区一九一〇人、浪速区一五八五人、中央区一一一七人、天王寺区一〇八四人、北区一〇七九人となっている［原　一九九九、二〇頁］。釜ケ崎が位置する西成区、その隣接区である浪速区・中央区および天王寺区、さらに北区という具合に、寄せ場を中心とする同心円的な広がり、およびターミナル駅（ＪＲ大阪駅、ＪＲ天王寺駅）を中心に野宿者が集中していることが分かる。同様に東京の場合も、全都四三〇〇人の野宿者の内、台東区一二九八人、新宿区九二八人となっている［新宿連絡会　一九九九、五頁］(6)。台東区は寄せ場（山谷）が、新宿区はターミナル駅（Ｊ

R新宿駅）が位置する区である。このように大阪や東京の野宿者は（名古屋や横浜の場合も）、寄せ場を中心とする区域、ターミナル駅（さらに大きな公園）を中心とする区域に分布・集中する状態になっている。

野宿者が増加するにともない、当然、行き倒れて路上で、救急車のなかで、あるいは病院で死ぬ野宿者も増加する。たとえば東京・新宿区で、一九九四年に二一人、九五年に三五人、九六年に四九人、九七年に五六人の「住所不定者死亡者」がカウントされた［新宿連絡会　一九九九、二八頁］(7)。大阪市の場合も、「行旅死亡人」が増加しているはずである。ところが、大阪市の行旅死亡人数は、一九九〇年に二五二人、九一年に二二五人、九二年に二四八人、九三年に二三八人、九四年に二〇一人、九五年に一九一人、九六年に九六人と減少している［原　一九九九、四三頁］。これには、二つの事情が考えられる。

その理由について、救急医療体制の整備にともなう減少という説もあるが、もう一つは、警察が野宿者から事前に住所、氏名や連絡先を聞き出しているため、「行旅死亡人」扱いにならないケースが増えているからという見方もある［野口　一九九七、五〇頁］。

釜ケ崎を含む西成区の行旅死亡人の減少は、さらに大きい。それは、一九九〇年の一二四人から九六年の一三人へ減少した［原　一九九九、四三頁］。ここには、警察による状況把握が正確になったこととともに、釜ケ崎の支援やボランティアのグループによる炊き出しや医療相談、パトロールなどの救援活動も、影響していると思われる。支援やボランティアの活動が、文字通り野宿者の命を救っているわけである。

そもそも行旅死亡人は、発見時にすでに死亡していた者に限られ、危篤状態で救急車に運ばれ、数日後に死亡したというようなケースは含まれない。とすれば、路上死に等しい状態で死んだ人の数は、かなり増加するはずである。その証拠に、救急車などで運ばれて入院した身元不明の人、つまり「行旅病人」の数は、年々増加している。西成区で、一九八〇年三三八一人、八五年五七四四人、九〇年六〇〇一人、そして九四年七一〇三人と、ここ一五年間で二倍以上の増加である。一九九四年に、大阪市で、行旅病人が一万五四四八人であったが、その内、西成区だけで半数を占めた［野口　一九九七、五一頁］。

厳密な把握はともかくとして、救急車で運ばれ病院で

死亡、身元がわかり引き取り手が出てきたものなど、より実態に近いものにすると、年間五〇〇人は越えるとみてよいだろう。西成労働福祉センター労組は、西成区だけで「六〇〇人もの労働者が行き倒れて死亡している」としている［野口　一九九七、五一頁］。

野宿者の像

今日の野宿者は、具体的にどのような人びとから成るのだろうか。

一九九八年に、東京の一四七人の野宿者に対して行なわれた聞き取り調査（一九九八年）によれば、野宿者の特徴は、次のようになる［野宿者・人権資料センター一九九八、二〇頁］。すなわち、野宿者の平均年齢は五五・一歳で、六〇歳以上が全体の三割に及ぶ。野宿期間は、一年未満が三二・七％、一年以上三年未満が一九・〇％、三年以上六年未満が二五・九％、六年以上が一七・七％である。野宿に入った理由は、「失業」が四九・七％、「仕事がない」が一九・七％、「家庭の事情」が八・二％、「事業の失敗」が四・七％である。野宿に入る前のおもな仕事は、「建設・単純労務」が二七・九％、「建設・技能職」が二三・一％、「サービス業・単純労務」（飲食店従業員、パチンコ店店員、ホテル従業員、賄い人、管理人、風俗業従事者など）が一三・六％で、その他、製造業、専門・技術、サービス業技能労務（調理師、船員、コンピューター技師など）、経営者、事務員、公務員、自営業者である。野宿者の現在の生計は、建設業日雇、本集め、ナラビ（ダフ屋の手伝い）、古物回収、運送（引越し補助）、エサ拾い（食料探し）などで立てている。それらの内、雇われ仕事についてみると、三五・四％の者が手配師を介して、一九・〇％が友人の紹介で、一六・三％が雑誌や新聞の求人広告によって得ている。

次に、田巻・山口らが一九九九年に山谷および上野公園の野宿者二〇八人に対して行なった聞き取り調査によれば、野宿者の特徴は、次のようになる［田巻・山口一九九九］(8)。すなわち、野宿者の平均年齢は五三・三歳で、六〇歳以上は全体の一八・五％である。野宿期間は、半年未満が四七・三％、一年未満が一六・一％、三年未満が二二・九％である。野宿が初めての経験者は、五二・〇％である。野宿に入った理由は、「日雇仕事のアブレ」が四一・四％、「病気・事故」が一一・六、「離職」が九・三％、「リストラ」が七・九％、「倒産」が六・〇％などである。野宿に入る直前の仕事は、「建設業」が七二・四％、「サービス業」が八・九％、

「製造業」が七・九％「運輸業」が四・四％、「卸小売・飲食業」が三・九％などである。現在の生計手段は、「建設日雇」が二〇・〇％、「炊き出し」が一五・一％、「拾い」が九・八％、「生計手段なし」が四四・九％などである。野宿後に雇用された者の就労先は、「建設業」が三三・八％、「運送業」（引っ越し補助）が四・五％、「サービス業」が二・五％などである。それらの雇用経路は、「駅・公園手配」が一二・一％、「縁故」が一一・一％、「新聞・雑誌広告」が六・〇％、「山谷で手配」が四・五％、「城北労働センター」が三・五％、「職安」が三・〇％などである。

最後に、一九九八年に地方中核都市・広島で行なわれた野宿者八三人に対する聞き取り調査によれば、野宿者の特徴は、次のとおりである［広島路上生活を明らかにする会他　一九九八、二－三三頁］。野宿者の平均年齢は五五・九歳で、六五歳以上が一六人である。野宿期間は一年未満が三〇人、一〇年以上が一四人である。野宿に入る前のもっとも長く就労した仕事は、工場労働者が二二人、建設作業員が一四人、建設技能職が六人、公務員が四人、運転手が四人などである。就労形態でいえば、常用労働者が三七人、日雇が二二人などである。野宿者の現在の生計手段は、建設業日雇が一九人、清掃業などの日雇が八人、古本などの回収が一二人となっている(10)。

いずれの調査もサンプルが小さく、方法的にも問題がないとはいえない。しかし、その他の民間グループによる野宿者調査を合わせても、結果から、概ね同様の傾向が知られる。それらの野宿者調査を総合すると、次のような、現代日本の野宿者像が浮かび上がってくる。一つ、野宿者の平均年齢が高いことである(11)。五〇歳代前半といえば、日雇仕事には体力が追いつかず、生活保護を受給するには若すぎるという、仕事と福祉の狭間にあるもっとも困難な年齢層である。二つ、野宿期間一年未満というように、野宿生活への新規参入者の割合が高いことである。これは、一九九〇年代後半に日本の野宿者が激増したという事実に照応している。三つ、野宿生活に入った理由で、日雇仕事のあぶれや、企業の倒産やリストラクチュアリングによる失業のためとする者の割合が高いことである。これも、近年の経済情勢を反映している。不況は一九九〇年代初めに始まったが、その影響が野宿者の増加として顕在化したのが、九〇年代後半ということになるだろうか。四つ、野宿に入る前の仕事で、建設業関連の仕事をしていた者がおよそ半分、その他、製造業関連、そしてサービス業関連の仕事をしていた者がめだつことである。その上で、中枢都市では建設業関

連の職種の割合が高く、地方都市では職種がばらつく傾向にある。五つ、現在の生計手段で、建設業日雇、次いで被雇用・自前のサービス業関連の仕事でしのぐ者が多いことである。建設業では、清掃、片づけ、軽易な整地・掘削、砂利敷き、短小杭打ちなどの軽作業が多い。六つ、雇われ仕事は、手配師・人夫出しや友人の紹介、求人誌などを経て就労する者が多いことである(12)。

これらの傾向はいずれも、現代日本の野宿者の形成と労働の点で、都市下層の典型像を示している。そこに、現代の野宿者が、世界都市化およびサービス経済化の直接的・間接的な産物であることが現れている。以下、その意味を具体的に解明するために、野宿者の階層規定および就労実態、野宿者の概念規定などをめぐる問題について分析・考察したい。

住居がないという現象だけにこの問題の本質があるのではなく、時代、時代の労働者が産業の発展と雇用政策の中、層としてどのような運命を強いられているかの問題であると考えます。…日雇労働者にとって野宿生活は、不安定な就労形態、低賃金、そして、単身者性と移動性という産業から強制させられる生活様式から、必然的な生活形態です［笠井　一九九五、六頁］。

二、野宿者の階層

野宿者の出身階層

現代日本の野宿者は、どこから来たのだろうか。この問いには、二つの意味がある。一つ、野宿者の出身階層が何であるかという問題である。二つ、野宿者の出身地はどの広がりであるかという問題である。ここでは、前者の問題について考察する。

本質論でいえば、野宿者は、資本主義経済体制の産物であり、都市の産業構造と労働市場の産物だということになる。日本においても、野宿者は、戦前はもとより戦後にも、敗戦直後の「ルンペン」から、「浮浪者」「住所不定者」を経て今日の「ホームレス」に至るまで、都市底辺につねに存在してきた。その意味で野宿者問題は、特段新しい問題とはいえない。岩田は、戦後の経済成長と福祉制度が解決できなかった、否、むしろそれらが生み出した貧困問題の、都市における当事者を「不定住的貧困」者と呼び、その形成と階層的・空間的な隔離のメカニズムをあきらかにした。そして、まさに「不定住」の人びとを不可視の底辺に囲い込んでいく過程こそ、日本近・現代の福祉制度の確立過程であったと洞察した［岩田　一九九五、一二―一五頁］。

野宿者は、たえずその存在形態を具体的に変えてきた。一〇年前筆者は、釜ケ崎を念頭に、寄せ場労働者が野宿者になっていく過程について分析した［青木　一九八九、Ⅱ－二］。しかしその頃は、今日見られるような野宿者の諸特徴が潜在化していたこともあり、野宿者を寄せ場労働者の「末路」として描くだけですまされる時代であった。しかし、いま私たちが見る野宿者の社会的存在は、経済のグローバリゼーションおよび世界都市化のもと、都市の経済構造総体が変容しつつあるなか、はるかに大規模で、はるかに複雑なものとなった。いまや野宿者研究は、寄せ場をさえ解体しかねない都市の産業構造と労働市場の変容の総体を射程に入れることなしに、行なえなくなった。

では野宿者は、どこから来たのだろうか。彼らの出身階層は、寄せ場労働者と不安定就労層の二つに分けられる。

まず、寄せ場労働者と野宿者の関係について考察しよう。先に掲げた調査結果に加えて、他の調査結果においても、「野宿に入る前に就いていたおもな仕事」で、半数前後の野宿者が、建設業関連の仕事に就いていたと答えている。また「野宿に入った理由」では、多くの野宿者が、「仕事がないから」と答えている。その含意は、建設業の日雇仕事であぶれが続いたということである(13)。このことは、とりわけ最大の寄せ場を抱える大阪都市圏に該当する。すなわち大阪市では、野宿者全体の五八％が、釜ケ崎から就労した経験をもつ人びとであるとみられる［原　一九九九、三四頁］。釜ケ崎から就労した経験をもつ野宿者の割合は、空間的に、釜ケ崎に近づくほどに上昇する。たとえば釜ケ崎周辺の四区（浪速区、天王寺区、中央区、西区）の野宿者では、釜ケ崎から仕事に行った経験をもつ野宿者の割合は、七八％に達する(14)。そもそも寄せ場労働者とは、その基本的な存在条件からして、日雇労働と野宿生活を繰り返す人びと、すなわち「流動的」過剰人口であった。この人びとは、いわば寄せ場の「基底層」である。彼らにとって、街頭は、次の仕事に向けての待機場所であった。しかし今日、そのように流動できる寄せ場労働者は、少数派になった。いまや多くの労働者には、いったん野宿者になると、そこからの脱出は困難になった。そして野宿者は、野宿が長引くとともに、日雇仕事への復帰を次第に諦めていく。こうして街頭に滞留していった人びとは、いわば寄せ場の「外縁層」である。彼らは、野宿生活の糧を求め、また野宿がしのぎやすい場所を求めて、釜ケ崎から外へ外へと流出しつつある(15)。

（野宿に入った―引用者）はじめのうちは、仕事もらおうと、朝早うからニシナリ（釜ケ崎―引用者）に通ったで。そやから、アオカン（野宿―引用者）は、ニシナリの近くやった。そやけど、なんぼニシナリに通うても、仕事がぜんぜんない。毎日、毎日、無駄足踏んで、そのうち、あほらしゅうなって、仕事なんかどうでもようなった。わいみたいな年寄りは、あかんわ。いまは、いろんなことやって、なんとかしのいでる。久しぶりに（釜ケ崎へ ― 引用者）帰ってきた。炊き出しはありがたいで。アオカンも、だんだんきつうなってな(16)。

今日の野宿者のもう一つの主要な出身階層は、都市の不安定就労層である(17)。野宿者調査において、野宿前の仕事では、運転手・ボイラーマン・パチンコ店店員・食堂店員など、建設業以外の仕事を答える野宿者が増加している。また野宿に入った理由では、仕事のあぶれ以外の理由を答える野宿者が増加している。いまだ多数派とはいえないまでも、これらの人びとが増加している原因には、まず、不況にともなう企業の倒産やリストラなどがある。たとえば大阪・扇町公園でも、釜ケ崎の存在を知らず、建設業の日雇経験をもたず、零細企業の労務職種、製造工場の派遣・期間労働などからいきなり野宿化した人が、何人も確認されている［釜ケ崎パトロールの会　一九九八・四・一六、二頁］。壮年・高齢者が企業や自営業から押し出されたけれども、頼るべき生計手段をもたず、また日雇労働市場という受け皿が狭くて仕事がなく、または日雇就労の方法を知らず、いきなり街頭へ流れ出るというかたちである［なすび　一九九五・五・二九］。いまや不安定就労層の多くの人びとにとって、階層的下降の歯止めがはずされた恰好となった(18)。

今日のホームレス問題は釜ケ崎を経由する事なくまたたくまに大阪一円広がり昨日大阪城の見回りで得た情報によると一〇二〇張りのブルーシートが軒並みに建ち、住む人の声を聞いた所、食事もろくに食べていないと私たちは聞かされました（文ママ）［中尾　二〇〇〇・二・二七］(19)。

不安定就労層から野宿生活へ入るもう一つの主要なグループは、若者である。一方で、野宿者にはまだ若者が少ないという控え目の報告がある［笠井　一九九九・五・二九］。他方で、若者が増加しているという報告がある［なすび　一九九九・五・二九］。その数が多いか少ないかはともかく、野宿者に若者が現れているという報

告は少なくない(20)。その原因は、まずは不安定就労の若者が増えたことにあろう。定職に就労しないで「フリーター」になるという、遊び志向の職業選択を行なう若者が増えたこともあろう。また、中学校を実質中途退学したり、高等学校を中途退学した半就学の若者も増加している(21)。さらに労働力需要の側において、サービス業関連の仕事など、若者が就労しやすい仕事が増加したという事情もある。これらの若者の多くは、就労への動機こそ壮年・高齢者の場合と異なるが、あいまいな雇用契約、安い賃金、劣悪な労働条件という不安定就労層(の下層)に参入して、仕事を転々とする。そしてそれら若者の一部が、常習の野宿者になっていく。彼らは、街頭で夜を明かしたり、車のなかや喫茶店で寝たり、友人のアパートを転々としたりする。ときには朝の寄せ場に立って、建設業の仕事に就労したりする。このような行動様式が、今、若者(の一部)に定着しつつある(22)。

野宿者の階層

このように、野宿者を街頭に生み出していく階層的な回路が変容してきた。まず、都市下層のなかで、日雇労働者から野宿者への下降が加速された。さしずめ日雇労働者を都市下層の「上層」とするなら、野宿者は「下層」に位置する。かつてのような流動性が滞り、たがいの地位はボーダーレスとなった。次に、不安定就労層(の下層)の一部が、ダイレクトに野宿生活に参入するようになった。このなかには、企業の倒産や解雇にあった人びと、家庭や施設を「飛び出た」高齢層の人びと、およびなし崩し的に学校や家庭から街頭に出た若者が含まれる。原は、「不安定居住」と「野宿」のボーダーにあって、多様な「都市雑業」に就労する「潜在的野宿生活者」層を「漸移帯」と呼んだ[原　一九九九、一四六～一四七頁]。彼によれば、この存在こそが、「ホームレス」の範囲の確定を困難にしているという。

寄せ場の労務手配機能が後退したことで、日雇労働者はもちろん、外社会の不安定就労層(の下層)もまた、いつでも日雇仕事に就ける寄せ場という受け皿を喪失して、ダイレクトに野宿者になる「憂き目」に曝されるようになった。他方、日雇労働者は、野宿者になって寄せ場から流出するにともない、不安定就労層(の下層)と仕事や生活空間をめぐって競合する羽目になった。要するに、野宿を介して、日雇労働者つまり都市下層と不安定就労層(の下層)の棲み分けが崩れたということである。しかもこの後にみるように、日雇労働者の労務手配のやり方が多様化し、駅や公園での就労、求人誌や新聞

の求人欄による就労、パート・バンクを介する就労が増加した。また、日雇労働者を囲い込む大小の人夫出し飯場が増加した。すなわち、寄せ場に替わる「ミニ寄せ場」である飯場が、市内の随所に現われた。このような寄せ場「機能」の拡散が、就労と野宿の往還を容易にした。…こうして野宿者の階層性は、いまや日雇労働者、不安定就労層（の下層）および若年層の、野宿を媒介とした複合的な過程のなかで、また労務手配のメカニズムの変容のなかで、ダイナミックに把握されなければならない。

野宿者は、野宿期間の長さによって、その内部で階層化される。すなわち建設業への就労と野宿を往復する者は、現役の日雇労働者か、それに近い流動型の野宿者である。彼らにとって、野宿は仕事への待機の時間と空間である。これに対して野宿期間の長い者、またはいったん野宿に入ってそこから抜け出せなくなった者は、常習型の野宿者である。彼らにとって、野宿はしのぎの中心であり、街頭は生活の拠点である(23)。

さらに野宿をしのぐ糧を得る手段や資源の大きさによって、野宿者は、その内部で階層化される。野宿者の年齢や体力、野宿のしのぎの知識と技術の大きさ（これは野宿期間に比例する）、野宿仲間や手配師、食べ物や再生資源をくれる商店主・炊き出しなどの支援やボランティア・行政職員などとのネットワークの広がりと深さが、生活資源の獲得のチャンスの大きさを決め、野宿のしのぎの力を決める(24)。

野宿からの脱出

野宿者が野宿生活を脱出するには、二つの道がある。一つ、日雇労働者に戻ることである。しかし、現役の日雇労働者に戻れるほどに就労状況は甘くなく、この道は実質閉ざされている。ただし野宿者は、いつか日雇仕事に戻ることを熱望している。実際、いずれの野宿者調査でも、体力がもつか否かはともかく、圧倒的に多くの野宿者が「仕事がほしい」「仕事を探している」と答えている［野宿者・人権資料センター　一九九八a、一一頁&一九九八b、四頁］。行政もまた、仕事への「更生」の援助を、野宿者の福祉施策の基本に置いている。一九九八年に、東京で「自立支援センター」構想が立ち上がったが、その目的もまた、野宿者の「更生」の援助である。ただし、そのような施策の実効性の評価については別問題である。今日、いとも簡単に野宿者が仕事に復帰できるような経済環境があるはずもない(25)。すなわちそこには、野宿者の「更正」の問題を越える状況がある。

仕事がほしい。我々は三時とか四時に起きて（寄せ場へ―引用者）仕事とりにいくんだよ。

六時までに決まらないと仕事ないんだよ。三日四日食べなくても仕事行くんだよ。こういう世界に入らないと実態はわからないんだよ。冬は寒いよ。仕事に行こうと思ってもないんだから。生きるか死ぬかだよ［野宿者・人権資料センター　一九九九・一二］。

二つ、生活保護を受給する道である。寄せ場でいえば、山谷や寿町、川崎では、ドヤを住居とする生活保護の給付が認められている(26)。したがって、これらの地域の生活保護率は高い。しかし釜ケ崎や笹島などでは、労働者や野宿者は地域住民とみなされない。そのため居宅保護は認められず、施設や病院への収容保護しか認められていない。いずれにせよ、街頭で孤立する野宿者が生活保護に到達することは容易なことではない。

野宿者への生活保護の適用をめぐる法的問題として、「住居があるか否か」および「稼働能力があるか否か」の二点が争点となってきた(27)。具体的には、ドヤを住居と認めるかどうか、そして年齢や身体的条件の点で稼働能力があるかどうかが争点となる。ドヤが住居と認められ、稼働能力がないと判断されてはじめて、生活保護が受給できることになる。しかし野宿者は、定まった住居がないから野宿をしているのであり、高齢や怪我、疾病などで働けないから、または働きたくとも仕事がないから野宿をしている。しかし現実には、肝心の人びとが生活保護を受給されない状態となっている。大阪市で一九九八年七月より、市立更生相談所が収容保護で施設に入所している人に敷金を出し、アパートに入居させ、それを住居として、その地域の福祉事務所が居宅保護に切り替えるという方法が出されている。それは、なし崩し的に野宿者に生活保護への道を開く一歩となるものではあろう。しかし一九九九年現在、わずか数ケースで実現されているにすぎない。

結局、野宿者は、病気などで路上に倒れ、通行人に発見されて救急車で病院に運ばれ、医師の診察を受けて「要加療」とされ、入院が決まってはじめて「収容保護」が認められるということである。すなわち野宿者は、「死ぬ目」に遭わないと、野宿生活から脱出できないということである。

「ルンペン」や「浮浪者」「仮小屋生活者」など、「不定住的貧困」者の救済問題は、戦後もずっとあった。しかし行政による野宿者への生活保護の適用は、つねに恣意性を免れるものでなかった。岩田は、戦後の生活保護法

が「不定住」者にとってもつ意味について、次のように述べている。

生活保護法は、一方で国籍、居住地を要件とする国民一般の生活困窮時の最低限保障として登場したが、他方「不定住」的な生活困窮への対応は必ずしも全面的なものではなく、保護費の二割を負担する自治体の実施機関による「現在地」の特定化や「急迫状態」の解釈、あるいは転宅費の認定の仕方、行路病人及行路死亡人取扱法との使い分けによっては、そこから排除される可能性を少なからず残したものといえる［岩田　一九九五、五七頁］。

三、野宿者の労働

野宿者の労働

野宿者は、街頭生活の日々をしのぐには糧を得なければならない。しかし街頭で糧を得ることは、容易なことではない。野宿者が生活の糧を得る方法は、大きく三つに分類される。まず、だれかに雇われて就労する方法である。次に、自前の仕事で収入を得る方法である。最後に、期限切れの食料や炊き出しにすがる方法である。野宿をしのぐ方法という意味では、いずれもまさに「労働」にほかならない(28)。野宿生活においては、日々生命をしのぐ行為自体が、街頭生活の中身をなす。そこでは、労働過程と生活過程の中心が重なり合っている。その意味で、野宿者の労働分析は、彼らの生活形態の分析と統一されなければならない(29)。すなわち野宿者については、生活を抜きに労働を語れない。本節ではこの点を承知しつつ、野宿者の労働の局面に焦点を当てて、野宿者分析を行ないたい。そうすることで、野宿者の労働を、都市経済の変容に関連づけて理解する道を確保できると思うからである。

だれかに雇われて就労する職種には、さらに三つの領域が区別される。一つ、建設業や製造業、サービス業の日雇仕事に就労する場合である。二つ、清掃人や警備員、引越し手伝いなどのサービス労務提供の仕事に就労する場合である。三つ、宣伝マンやダフ屋の手伝い（ナラビ）、切符もぎ、（パチンコの）タマ拾いなど、街頭での「雑業的」仕事に就労する場合である(30)。また仕事に就労する方法には、手配師や人夫出しに雇われる場合、求人誌や新聞の求人欄を通して雇われる場合、そして友人などの紹介によって雇われる場合が区別される。一般に、文字通りの青空生活者（アオカン者）には、飯場に入って

建設業に就労する日雇が多く、ブルーシートのテントやダンボール箱、小屋掛けに住む野宿者には、種々のサービス業関連の仕事をする者が多い。後者の方が野宿期間が長く、仕事を含めて定常的な野宿スタイルをもつ傾向にある。

路上にはいくつかのグループがあり、自分が（横浜駅―引用者）東口の代表で、地下通路の連中の代表者と必要に応じて話し合いを持っている。何でグループを作るかって、そりゃ食うためよ。誰かが仕事に行けりゃ、みんなで分けて食べる。誰も仕事にいけない日は食い物を集めに行くんだけど、食い物を誰かが拾えれば、みんな食えるじゃないか。自分がプレハブ（寿町内の臨時宿泊所―引用者）に泊まらないのは仲間が横浜駅にいるからね。ブラッと誰かが訪ねて来たときにいないじゃ申し訳ないじゃない［寿支援者交流会　二〇〇〇・三・一〇、五頁］。

飯場型労働

建設業の日雇仕事において、近年とみに寄せ場や職業安定所での求人が減少し、手配師や人夫出しの求人活動が、野宿者が集住する駅や公園で行なわれるようになった(31)。また臨時・日雇求人のための、求人誌や新聞の求人欄、パート・バンクなどの民間の求人システムが拡張されてきた。日雇仕事の手配は、寄せ場に労働者をプールして、そこから仕事現場に送り出すという「見える」かたちから、市内に分散した大小の人夫出し飯場から、また、雑誌や新聞を通して路上から仕事場に直行するという「見えない」かたちへ移行した。反対に、寄せ場での日雇仕事の手配の実態が見えなくなった。すなわち、飯場を経由しない就労が増加し、また野宿者は、飯場に入らなければ仕事に就労できないということになった(32)。こうして、街頭で労働者を雇用する人夫出し業者が増加していった。その光景は、たとえば東京では上野公園や新宿駅などの公園や駅で見ることができる。上野公園だけで、一〇〇人もの野宿者手配の人夫出し業者が出入りしている［なすび　一九九九］(33)。また、ビルディングの清掃やメンテナンスなどのサービス業関連の業者が、野宿者を追って建設現場にまで入り込んでいく例もある［全国日雇労働組合協議会　一九九八b］［連合大阪・あいりん地区問題研究会　一九九八、一三頁］。

他方、よりよい労働力を確実に確保したり、労働災害を防止するために、企業による労働者の管理が強化されてきた。現場への就労には、連絡場所の登録が義務化さ

れた。その結果、住所をもたない者が雇用から閉め出されつつある。以前ならば寄せ場の日雇労働組合を連絡場所にしていた労働者が、今は飯場の所在地を連絡場所にするという例も増加した。またこのような拡散した労務手配にあっては、野宿者は生きるために、雇主が提示する雇用条件に一方的に服従せざるをえない。その結果、不利な契約関係に立たされることにもなった。狭い部屋に五人も六人も詰め込み、「恐いお兄さんが」労働者を監禁して外出さえ許さず、現場では仕事に追い回し、しかも賃金もろくに払わないという「刑務所飯場」、すなわち「タコ部屋」も現れている。個別に分散した野宿者は、賃金が安かろうと、労働条件が悪かろうと、ただ黙々と雇主に従うしかない(34)。飯場には、最低賃金の基準があるわけでもなく、野宿者の人権を守る運動があるわけでもない(35)。公共事業などで、ゼネコンの安い工事単価のため人件費を切りつめて、野宿者をほとんど無報酬で酷使するという雇主や、はじめから雇用した者に賃金を払う意志のない(ヤクザ絡みの)雇主も現われている[なすび　一九九九](36)。

オヤジに指をつめろっていわれ、怖くなって飯場から逃げ出してきたんです。手取り五〇〇〇円と聞いていたんですけど、七ケ月働いて賃金ろくすっぽ払われなかったし・・。今、飯場には四〇数人の仲間が残っていますが、みんなそうでしょう(37)。

賃金の不払いが長期化して、飯場暮らしが一～二年と長引く者もいる。また、飯場のなかで仕事にあぶれたり、ようやく仕事に出て賃金を稼いでも、飯場の部屋代・飲食代などの「ボッタクリ」にあって(不当に高い料金を払わされて)、稼いだ賃金が消えてしまうということにもなる。しかし、そうなることが分かっていても、飯場にさえ入っておれば、当座の宿と飲み食いだけは確保できると、ただ働き同然を承知で飯場に「避難」せざるをえない野宿者もいる。かつて飯場は、日雇労働者にとって現金仕事がないときの待機場所であった。今それは、そこでかろうじて食いつなぐだけの「ヤド」となった。雇主は、そのような野宿者の足元を見越して、思う存分彼らを収奪することになる。そして野宿者は、契約が開けて飯場を出て、ふたたび街頭に舞い戻っていく。賃金不払いや賃金をもらっても月に二～三万円の手取りという低賃金である。野宿者は仕事に就いてさえ、結局、街頭に舞い戻るしかなく、飢餓生活からの脱出は叶わない(38)。事故にあったり病気になれば、なおのことである。

（高田）馬場以外からは行かないさ。やばいとこが多いだろう。浅草とか上野とか、ヤクザがらみの飯場が一杯だ。俺の知り合いで、浅草から飯場に入って、現場でケガして入院した奴がいた。当然労災だろう？ところが奴は、「お前の不注意でケガしたんだから病院代は自分で出せ。デズラ（賃金――引用者）も迷惑かけたんだから払わねえ」って言われてよう、退院してすぐ飯場から叩き出されたんだってよ［全国日雇労働組合協議会　一九九九、六頁］(39)。

若者の就労

一九九〇年代後半に、若い野宿者の存在が確認されていることはすでに述べた。東京や大阪など大都市のターミナル駅やダウン・タウンで、多くの若者が深夜車を飛ばし、ゲーム・センターやコンビニエンス・ストアに群れ、地下道で夜を明かす。朝の電車で、自宅に帰る若者が座席で眠りこける。これらの若者で、街頭が生活の中心である野宿者になる若者といえば、ごく一部かもしれない。しかし、壮年・高齢者が野宿者になる動機や経緯とは異なるものの、これらの若者と野宿生活のあいだのバリアは、それほど高くないように思われる。一九九二年一〇月に釜ケ崎で暴動が起きたが、その時群衆の先頭で警官隊に投石したのは、外から来た「突っ張る」若者であった。この若者の少なくとも一部は、将来的または潜在的に野宿予備軍となる人びとである。一九九五年一〇月一八日に大阪市中央区・道頓堀の戎橋で、野宿者が二人の若者によって川に投げ込まれ、野宿者が溺死するという事件が起きた。この時、野宿者を川に投げ込んだ若者もまた、仕事を転々として、ダウン・タウンの街頭などで夜を明かす若者であった。これらの若者の家庭・教育の背景や、価値観の変化といった一般的事情はともかく、彼・彼女らがどこから来て、どのような生活をしているのだろうか。昼は土建業や製造業、サービス業で臨時や日雇の仕事で働くかたちで、アルバイトを転々として生活費や遊興費を稼ぎ、それがなくなると野宿する。このような若者が、野宿世界のすぐ間近かに控えている(40)。

多くの若者が、「フリーター」として建設業やサービス業に就労する。彼らは、求人誌や新聞の求人欄、友人などの情報によって、働き口をみつける。そして自宅や友人宅、寝起きする車のなかから、携帯電話で雇主に電話し、契約を結び、そこから仕事現場に直行する。こうして若者は、自宅や友人宅と、街頭と、仕事場の三つの場所を行き来する。かりに彼らが多くの時間を街頭で費

やすとしても、自宅（や家族）とまったく切り離されているわけではない。その意味で、彼らの境遇は単身の野宿者とは異なる。しかし反面、雑誌や新聞で仕事を探し、電話で契約を結んで仕事に就労する若者は、駅や公園で手配師や人夫出しから仕事を得る野宿者より、いっそう孤立した労働者でもある(41)。雇主との契約が一方的であるだけ、たとえ彼らが身体壮健な労働者であるとしても、賃金は低い。彼らに、賃金や労働条件の相場を判断する知識も関心も乏しく、また雇主と「交渉する」という発想も希薄である。その分、彼らの労働条件は悪くなる。

四、今日の野宿者

「新しい」野宿者か

本稿は、都市の労働市場に参与する野宿者を、その階層的な形成過程および就労構造に焦点を当てて論じてきた。もとより、今日われわれがみる野宿者とかつての「浮浪者」とは、形成過程も就労構造も大きくずれている。一九八三年に起きた「横浜浮浪者殺傷事件」と九五年に起きた「道頓堀ホームレス殺人事件」も、殺された野宿者の背景や社会的状況は異なる。日本の野宿者は、「浮浪者」から「ホームレス」へ「変わった」(42)。近年の野宿者には、現役・元日雇労働者でない、不安定就労下層からの参入者もまた増加した。笠井は、これらの野宿者を「ニュー・ホームレス」と呼び、一九九五年にこの人びとが新宿の野宿者の四割に及ぶとした［笠井一九九五、一一頁］。そしてこの型の野宿者の増減が、企業全般の雇用破壊がどこまで進むかのバロメーターであるとした(43)。他方、日雇労働者出身の野宿者にしても、日雇仕事に戻ることはますます困難になった。サービス業関連の仕事に就労する野宿者も増加した。野宿者に若者がめだつようになった。今、夫婦者や女性の野宿者さえ増加しつつある(44)。

このような「新しい」現象は、今後、どこまで広がるのだろうか。そもそも近年の野宿者は、「新しい」野宿者なのだろうか(45)。その場合、「新しい」とは何を指すのだろうか。これらの問いは、野宿者をめぐるあれこれの現象のみならず、形成過程や就労構造といった客観的条件や、生活様式や意味世界といった主観的条件の変容をどう理解したらいいのかという、すぐれて「全体的な」認識に関わる問題である。本稿は、野宿者の限られた側面、すなわち野宿者の階層と労働という局面に絞って、野宿者の変容を見たにすぎない。問われるべきは、野宿者の「新しい」現象が、「野宿者」理解の変更をも迫っ

ているかどうかである。しかしこの理論的課題は、次稿に委ねざるをえない。

注

(1)「隠蔽しえぬ外部」は、西沢の『隠蔽された外部』をもじった表現である。ブラウは、アメリカのホームレスを、「見える貧困者」（visible poor）と呼んだ［Blau, J. 一九九二］。

(2)ジェンクスもまた、ホームレスの定義と人口の関係について論じ、その一義的な確定の困難さを指摘している［Jencks, C. 一九九四、一～七頁］。

(3)川崎市では、行政の越年対策事業で、一九九七年一二月二九日～九八年一月四日に、臨時宿泊所である市立体育館に一日平均三〇九人の野宿者が宿泊した。

(4)神戸市内七区で一九九九年七月二日午後八時～三日午前一時に行なわれた野宿者調査では、四九九人（男四七二人、女二七人で、三分の二が五〇歳～六〇歳代）の野宿者がカウントされた［青木（幸）一九九七・七・二六］。

(5)野宿者のほとんどは、単身の男性である。これが、日本の野宿者の最大の特徴である。しかし女性や夫婦づれの野宿者がいないわけではない。近年に、女性の野宿者が少しずつ増加している。女性の野宿者は、たとえば東京都二三区内で、一九九八年二月に一・七％（野宿者総数は三一八一人）であったが、九九年二月には二・三％（総数四五七二人）と倍増した［池田　一九九九］。女性の野宿者にも、高齢の人が多い。高齢化にともない、住み込みの仕事を失い、野宿に至ったというケースが報告されている。これまで、女性の野宿者が可視化することはなかった。それは、女性の場合家政婦などの住み込みの仕事に就くことができたし、女性向けの保護施設が比較的整っていたからである。若年女性の野宿者が少ないのは、水商売に流れている事情によるとも推測される。本稿では、これらの事実を承知した上で、寄せ場に繋がる野宿者ということで、男性の野宿者に焦点を当てて議論する。しかし学校や家庭を抜け出してダウンタウンにたむろする一〇代の女性たちが、どのように「小遣い」を稼ぎ、また将来どのような仕事に就いていくのかは、興味深い問題である。女性と都市下層の関わりをめぐる調査や研究は、まだ皆無に近い。

(6)この報告書によれば、一九九八年八月に全都に四六七七人の野宿者を数えた。それは、一九九五年二月

時点では三三〇〇人であった［新宿連絡会　一九九九、五～六頁］。他の都市においても、野宿者数の動向は似た傾向にある。

(7)一九九七年の五六人の内、行旅死亡人は二二人であった［新宿連絡会　一九九九、二八頁］。

(8)この聞き取り調査には、筆者も部分的に加わった。数字は、筆者の集計によるものである。

(9)この調査は、一九九八年二月四日に広島市内一八ポイントで実施された。

(10)一九九九年に広島市内に一四〇人、郊外地域を入れて二〇〇人ともいう［中園　一九九九・一二、六四頁］。

野宿場所はＪＲ広島駅・市民球場・平和公園など公園・河川敷に集中する。

(11)野宿者の年齢は、どの都市も五〇歳代前半であるが、その上で、東京では三〇歳～四〇歳代の若者がやや多く、他の都市では六〇歳代がやや多いという［岩田　二〇〇〇、七二頁］。

(12)笠井は、野宿者問題の今日的な特徴として、次の諸点を掲げている［笠井　一九九五、八頁］。①野宿者の数が、爆発的に増えていること。②その生活空間が、寄せ場の外へ、外へと広がっていること（広域化）。③定着型の野宿スタイルが、広範囲に生まれていること（定着化）。④建設業以外のサービス業、中小零細企業から、野宿者が大量に排出されていること。⑤高齢化した労働者が、大量に排出されていること。⑥グループごと、自生的な団結形態が生み出されていること。

(13)野宿者調査の用語において、「失業」と「仕事がない」とは意味を異にする。「失業」は常用ないし臨時雇用などの仕事を失ったという意味であり、「仕事がない」は日雇仕事にあぶれたという意味である。

(14)一九九五年に、大阪市立大学のグループが大阪市内四区の二三六人の野宿者に対して行なった聞き取り調査の結果である［原　一九九九、三四頁］。

(15)大阪・北区のＪＲ大阪駅近くの扇町公園にも、釜ケ崎から出てきた野宿者が少なくない［釜ケ崎パトロールの会　一九九八、二頁］。

(16)野宿者Ａさん（六〇歳前半）の話。一九九九年一月二日。釜ケ崎・三角公園にて。Ａさんの顔は、夜に暖をとる焚き火の煤で真っ黒である。

(17)技能工や職人、公務員・事務員のホワイトカラーや販売・サービス業の主任、小経営者などの安定就労層からいきなり野宿者になる者も、少ないが現れて

いる［岩田　二〇〇〇、一八一頁］。一般的には、安定職から不安定職へと、段階的に職歴下降を辿って野宿者になっていく。しかし近年は、安定就労層から野宿層へのダイレクトな職歴の下降を辿る者が出ている。彼らはときに「ネクタイ・ホームレス」とも呼ばれる［北大阪越冬闘争実行委員会　一九九九・一・二］。大阪駅や新宿駅などのターミナルで、その姿が多く見られる。新宿には、朝、街頭のダンボール・ハウスのなかで背広に着替えて会社へ通勤する野宿者さえいるという。大阪では、そこまでの話はまだ聞かない。「リストラされた中堅サラリーマンや高齢者が再就職を阻まれたり震災で低額アパートから追われた。釜ケ崎以外で出会った野宿者の半数以上は建設労働の経験のない人であった」［釜ケ崎パトロールの会　一九九七・一二・一三］。

(18) 一九九九年一〇月～一一月に、東京西部圏（新宿・渋谷・豊島）で三〇三人の野宿者に対して行なわれた調査によれば、全体に常雇→日雇→野宿という就労経路を辿る傾向にはあるものの、野宿期間一年～三年層（つまりこの三年以内）の人びとに、常雇から失業を経て野宿に直行した者が増加した［野宿者・人権資料センター　一九九九・一二、二一～三五頁］。そこでも、日雇労働市場の失業の受け皿としての機能（すなわち雇用調節機能）が低下して、「底の抜けた社会」が現出しつつあると指摘される。

(19) 一九九九年七月末に、大阪城公園東部の「市民の森」で四五〇のテントが確認された［朝日新聞　一九九九・七・三一］。夏に、日中はテントは暑く、野宿者たちは涼を求めて地下街に「移民」する。

(20) 東京・渋谷で、昨今の就職難のため大学卒の若者（三〇歳代以下）が不安定職種に押し出された結果、その煽りをくった低学歴の若者の野宿者がめだつようになったという［下川　一九九九］。この指摘は、どこまで妥当なのだろうか。大阪では、野宿者人口に占める釜ケ崎の現役・元日雇労働者の比重が圧倒的に大きく、それに比して、街頭にたむろして野宿者となっていく若者はまだ少ないように思う。

(21) 小倉は、若者の自発的失業の増加は、高校中退者の増加に対応しており、そのような若者が「新たな下層」を形成しているという［小倉　一九九九］。また、恵まれない家庭環境のゆえに親に頼れない若者も多く、家出して遊び呆けた挙句に野宿者になったというイメージは当たらないという指摘もある［読売新聞　二〇〇〇・三・九］。

(22)一九九九年一月、若い男が伝言ダイヤルを使って、若い女性に薬物を売るという事件「伝言ダイヤル事件」があった。逮捕された男は二三歳の土工で、彼は車のなかで寝起きし、携帯電話で仕事を見つけては就労するという生活形態の若者の一人であった［朝日新聞　一九九九・一・八］。

(23)一、で掲げた野宿者調査では、野宿期間が一年以上三年未満の者が四四・九％であった［野宿者・人権資料センター　一九九八b、二～一〇頁］。ここから、ここ三年すなわち一九九〇年代後半突入期が、野宿者急増の転換期となったことが知られる。

(24)筆者は、次の論文で野宿者の階層分析を試みた［青木　一九九六、一四〇～一四一頁］。

(25)自立支援センターをつくるという東京都の約束にもかかわらず、センターが「迷惑施設」であるという住民の反対を理由に、建設計画の実施は大幅に遅れた。ようやく一九九九年末に、最初のセンターが設立の運びになった。

(26)川崎では、「（一九九七年の－引用者）一年間で実数二五〇人程が生活保護になり、野宿者は約四割減少した。路上に新しく排出されるスピードより居宅保護になるスピードが勝っている。…野宿者の生活保護適用は、川崎市の越年対策事業に関わる唯一最良の部分だった」［水嶋　一〇四頁］。しかしこの実績は、野宿者と彼らを支援する人たちの生活保護適用の要求運動の成果でもある。

(27)一九九三年名古屋で、当時五五歳だったBさんが足を痛めて就労できず、また就労可能な仕事を探したが見つからないとして、生活保護を申請した。しかし福祉事務所は、Bさんに「稼働能力」があるとして、申請を却下した。Bさんは、生活保護を認めないのは憲法違反であるとして、市と福祉事務所を相手に訴訟を起こした。裁判は一九九六年一〇月、一審判決でBさんが全面勝訴し、九七年八月、二審判決で全面敗訴した。一九九九年一二月、Bさんは病に斃れた。現在、支援者により最高裁判所での係争が続いている［いのちと権利を守れ！林訴訟を支える会　一九九八］。その後、同様の訴訟が大阪でも起こされ、これも訴訟中である。

(28)今、脱工業化時代における「新たな」労働概念をめぐる議論が進められている。ならば、野宿者の極限的な生命維持のためのさまざまな「労働とはいえない労働」にもまた、労働概念が拡張されなければならない。そのような労働もまた、財の社会的な消費

と再生産の循環にしっかり参加しているわけだから。

(29)筆者はかつて、寄せ場労働者における労働過程と生活過程の関連と区別するかたちで、野宿者のそれらの関連を分析する枠組みを提示した［青木　一九八九、一一〇～一一一頁］。その枠組みは、基本的に今日の野宿者研究にも妥当すると考える。

(30)ここで「雑業的」とは、「多様で雑多な」という意味である。都市雑業層という用語がある。その表現のもつ粗雑さに引っかかる。本来は、それに含まれる諸職種を無造作に一括するのでなく、都市の産業・労働市場における位置と機能に照らして、一つひとつ腑分けして論じられなければならない。

(31)たとえば山谷・上野周辺の野宿者の七割は建設業に就労するが、その内、山谷経由の仕事はわずか一割程度という［中村　一九九九・一二、五五頁］。

(32)建設業の不況のなかで、一次下請の企業が施工能力を高めてゼネコン化し、飯場経営を拡大して二次・三次下請を作り、飯場網を発達させていった。一九九五年に六二五人の建設業者に対して行なわれたアンケート調査でも、半数近い回答者が、工事の専門化による仕事の分離発注・仕事減・労務コストの削減のため、企業の下請の重層化が「進んだ」と答えている［雇用促進事業団　一九九九、一二頁］。

(33)上野公園の野宿者に炊き出しや労働相談を行なっているグループは、五五の業者の存在を把握している。公園全体ではこの二～三倍の業者がいるという「中村　一九九九・一二、六一頁」。野宿者は六〇〇人で、飯場に入っている者を含めておよそ二〇〇〇～三〇〇〇人の野宿者が、これらの手配師や人夫出しを経て仕事に出ている。

(34)スポーツ新聞の手配では、飯場に入る土工の場合賃金九〇〇〇円～一万円で、これから飯代・部屋代を二〇〇〇円引いて、手取り七〇〇〇円～八〇〇〇円というのが一九九九年現在の相場である。上野駅・公園の手配では、六〇〇〇円～六五〇〇円マイナス一五〇〇円で、手取り四五〇〇円～五〇〇〇円というのが相場である。現在は新聞手配の単価が下がって、駅・公園手配との単価の差はなくなりつつある。これに対して、山谷の相場は一万円前後というから、新聞や駅・公園手配の単価は、寄せ場手配の賃金の半額程度でしかない。孫請業者が上から受け取る金額の相場は一万六〇〇〇円位というから、業者のピンハネ高は大きい。ピンハネ率は、不況になるほど大きくなる。山谷の労働運動家Cさんの話。一九九

九年一一月二日および一一月二二日。

(35)実際、街頭から仕事に出て賃金をもらえなかったという労働相談が、近年、日雇労働組合や地域ユニオンに殺到している。なかには労働者を飯場に監禁し、三年間もただ働きさせたという例さえ報告されている［中村　一九九八、一七一頁］。野宿者の労働相談の九九％は賃金不払い問題であり、それは寄せ場で出される多様な生活・労働相談と好対照をなす［中村　一九九九・一二、五九頁］。

(36)上野公園は暴力団C会系業者が仕切り、傘下の業者から入会費（三〇〇万円ともいう）や月会費を徴収している。払わない業者はもぐりということになる。もぐり業者は、夜こっそり手配に来る。他方、新宿や高田馬場は暴力団D会が仕切る。彼らのあいだには、厳しい縄張りがある。山谷の労働運動家Eさんの話。一九九九年一一月二日。事情は大阪でも同様である。「今、飯場経営の裏側は、ほとんどヤクザの系列で組織されているのが実状です。（釜ケ崎―引用者）地区内だってそうです。この露店は何々系、この横の筋は何々系といった具合に、もう完全に仕切られている」（労働運動家Fさんの話）［野口　一九九七、五七頁］。

(37)Gさん五六歳の話。このオヤジは自称「D会のヤクザもの」という［山谷労働者福祉会館　一九九九、二頁］。

(38)神奈川県労働局が県内にある二六七の作業員宿舎（飯場）の立ち入り検査をしたところ、全体の四七・六％で避難訓練・消火訓練の未実施、避難階段・警報設備の未設置など、労働基準法や労働省規定の違反が確認された。労働局は、業界に対して改善を指導した。一九九四年には海老名市の宿舎の火事で八人が焼死し、九九年には伊勢原市の宿舎の火事で一人が焼死した［読売新聞　二〇〇〇・四・一三］。ここからも、人命軽視の飯場の実態が知られる。

(39)寄せ場の日雇労働組合は、野宿者の利益を守るために、悪質な手配師・人夫出しに対する糾弾と交渉の活動に取り組んでいる。山谷争議団は、一九九九年一月～一〇月の間に一五業者について労働相談を受け、被害者五〇人の賃金・慰謝料等を払わせた。山谷の労働運動家Eさんの話。一九九九年一一月二日。「山梨のA企画（匿名―引用者）が、B企画（同）と名を変え、手配師・N（同）がまた動き廻っている。不払いだから要注意！」［全国日雇労働組合協議会　一九九九・一二・一八］。

(40)東京・新宿駅（西口）前の広場で、野宿する「おじさん」のすぐ隣りで横になる若者の姿は、たがいに異質な世界に住む双方のあいだの社会的存在の近さを見せつける。一九九九年五月二九日の深夜の観察より。

(41)若者を冷暖房付きの個室部屋に住まわせ、建設業関係の免許を取らせて職人に仕立て上げて、彼らを仕事現場に送り出すという人夫出し業者さえ現れている［中村　一九九八、一七一頁］。

(42)横浜浮浪者殺傷事件とは、一九八三年一月一二日から二月一〇日のあいだに、横浜市中区の山下公園界隅で野宿者が少年たちに襲われ、内三人が殺され、一〇数人が重軽傷を負った事件である。道頓堀ホームレス殺人事件については、先に述べた。これら二つの事件は、社会的背景も被害者の事情、マス・メディアの反響もたがいに異なる。

(43)大阪駅界隅におよそ二〇〇〇人の野宿者がいるが、そこには非日雇の野宿者が多く含まれる［大阪キタ九八〜九九越冬闘争実行委員会　一九九九・一・二］。

(44)それでもなお、女性や夫婦連れの野宿者は、欧米や途上国のホームレスと比べてはるかに少ない。また日本には、（一〇代の若者を除いて）子どもの野宿者はいない。ここに、日本の野宿者の特異な形成過程がある。

(45)一九九九年五月に開催された第一三回日本寄せ場学会総会のテーマは、「新しい都市下層は成立したか？」であった。

引用文献

青木幸展［一九九九・七・二六］「神戸市の野宿者について」Eメール情報「寄せ場」より

青木秀男［一九八九］『寄せ場労働者の生と死』明石書店

青木秀男［一九九六］「野宿者と現代都市―野宿者の形成と概念をめぐって」井上俊他編『都市と都市化の社会学』岩波書店

朝日新聞（東京版）［一九九九・一・八］「『出会いツール』悪用伝言ダイヤル事件」

朝日新聞（東京版）［一九九九・七・三一］「失業列島　地域差じわり」

池田幸代［九九・六・二一］「女性と貧困」Eメール情報「寄せ場」より

いのちと権利を守れ！林訴訟を支える会［一九九八・五

・二〇〕『ニュース』二一号
岩田正美〔一九九五〕『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』ミネルヴァ書房
岩田正美〔二〇〇〇〕『ホームレス／現代社会／福祉国家－「生きていく場所」をめぐって』明石書店
大阪キタ九八～九九越冬闘争実行委員会〔一九九九・一・二〕街頭宣伝ビラ
小倉利丸〔一九九九〕「不可視の『階級』としての『下層』」第一三回日本寄せ場学会総会　報告レジュメ
笠井和明〔一九九五〕「いわゆる『ホームレス』問題とは－東京・新宿からの発信」日本寄せ場学会『寄せ場』八号　現代書館
笠井和明〔一九九九〕「都市雑業から見る、新たな、そして古い層」第一三回日本寄せ場学会総会　報告レジュメ
釜ケ崎パトロールの会〔一九九七・一二・一三〕『前略、路の上より～大阪発』一号
釜ケ崎パトロールの会〔一九九八・四・一六〕『前略、路の上より～大阪発』二号
川崎水曜パトロールの会〔一九九九・七・二五〕『頭痛のたね　なつ』一九九九年　二巻一四号
寿支援者交流会〔一九九九〕『この間の報告とこれから』四巻二二号
寿支援者交流会〔二〇〇〇〕『この間の報告とこれから』一巻四四号
雇用促進事業団〔一九九九〕『建設業における下請構造に関する調査』
三省堂編修所〔一九六七〕『新国語中辞典』三省堂
山谷争議団・反失業連絡会〔一九九九・一一・二一〕ビラ「越冬闘争の準備に入ろう」
山谷労働者福祉会館運営委員会〔一九九四〕『山谷から』四一号
山谷労働者福祉会館運営委員会〔一九九九〕『山谷から』七五号
下川（のじれん）〔一九九九・七・一〕寄せ場Eメール情報より
新宿連絡会〔一九九九〕『路上からの提言－「路上生活者問題」に関する私たちの見解と政策提言』
全国日雇労働組合協議会〔一九九九〕『日雇全協ニュース』九〇号
第三〇回釜ケ崎越冬闘争実行委員会〔二〇〇〇・一・三〕ビラ「日刊　えっとう」
田巻松雄・山口恵子〔二〇〇〇〕「野宿者の就労面－東京東部圏（山谷・上野）の野宿者聞き取り調査報告」

野宿者・人権資料センター『Shelter−less』五号　現代企画室
中尾春男［二〇〇〇・二・二七］ビラ「同志　冬樹を送り出すと共に無数の冬樹を追悼する　勝ちとる会」
中村光夫［一九九八］「寄せ場と飯場の一〇年−山谷を中心に」日本寄せ場学会［一九九八］『寄せ場』一一号
中村光夫［一九九九・一二］インタビュー「飯場居住型層の飢餓賃金−上野の労働相談から」野宿者・人権資料センター『Shelter−less』四号　現代企画室
なすび［一九九九］「九〇年代後半における『下層』と野宿労働者に依拠する低賃金土建労働」第一三回日本寄せ場学会総会　報告レジュメ
中園健一［一九九九・一二］「市政への働きかけから」野宿者・人権資料センター『Shelter−less』四号
西澤晃彦［一九九五］『隠蔽された外部−都市下層のエスノグラフィー』彩流社
野口道彦［一九九七］「釜ケ崎の路上死−高齢者清掃事業の課題」日本寄せ場学会『寄せ場』一〇号　れんが書房新社
野宿者・人権資料センター［一九九八］『センターニュース』一号
野宿者・人権資料センター［一九九八］『センターニュース』二号
野宿者・人権資料センター［一九九九］『Shelter−less』四号　現代企画室
野宿者・人権資料センター［二〇〇〇］『Shelter−less』五号　現代企画室
原和博［一九九九］『現代日本の野宿生活者』学文社
広島路上生活を明らかにする会他［一九九八］『広島市の「ホームレス」路上生活者聞き取り調査（一九九八年二月四日）報告書』
松繁逸夫［一九九九・五・一四］「ホームレス問題連絡会　ホームレス問題に対する対応について（案）」
Eメール情報「寄せ場」より
水嶋陽［一九九七］「体育館と川崎球場との断絶−第三次川崎越冬闘争の報告」日本寄せ場学会『寄せ場』一〇号
読売新聞（大阪版）［一九九九・一二・一八］「野宿者二万人超す」
読売新聞（大阪版）［二〇〇〇・三・九］「野宿二〇〇〇春　①」
読売新聞（神奈川版）［二〇〇〇・四・一三］「相模読売」

Blau, Joel [1992] The Visible Poor : Homeless in the United States, Oxford University Press.
Jencks, Christpher [1994] ***The Homeless***, Harvard University Press.